





傳

山本

門 13  
部 1707  
6

利



上席

吾妻弦百物かゝるまはるのまゝ  
在郷乃茶弦み響き賤し久  
京の目利茶系よしハ命る年  
似しや安年浪義忠は流  
夜影よ来の南よとらせきを  
昼ろくし一舞衣あまは  
好ま人もめんく日夜



年忘影角力巻一

○画工の撥摺

瀬川

去方よ表を原をわくく画工を  
何日一人来りてあんなをまふ画工  
四十過く法人おしした男あり何の内用と  
弦を少おれ中にし何でりあござり  
ままのちあまといまの猿とあ  
しおづあづしおまのま  
これの是らの今を十二  
七の七の目

拙者ハ寅のうゝ女たハのうゝてさぐる由二編  
はいつて常掛とくがけよいつておくはりよて  
とゆれが 禹ユ ああこは子さぬびざりませぬか  
申のちのほ子があうハ襦ぬえ一丈で海まきるが  
ナア

△井ざりー 可子

小ぼめの女房はしあづめの女房を門口あうさそふ  
ておまきさんあちの芝居しばいでん録とくしてあつて二つ目  
見みもくがおせん久く おまきく マア先ハお出そーたらう  
とらるぞくとさだむむひり志しをうくして改かりよさるの

門口うおまきくさんあおお出せんどのとひハ4かな  
あつてなあちの人ハあどやあつてあつてあつたあ  
今切きてとやあつてとつてとつてとつてとつて

○辻出雲ついでのりき 菅水

俄ひやうわめるよ辻出雲ついでたううとさあを旅人たびはさうあつて合あい  
あうさあさるをコレハハ去来きらいとあつてハイさのつ家  
ううと意いのよいでよびよまのつはしとあつておれ  
大おの物ものがよいつてあつてあつてあつてあつてあつて  
がけあつてあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

あつらひもたひらひと後かきどおざりしまよひがはるま  
 まさふす一かうとく 持おていつたぬむじがたをうり  
 あるてあざりませうがそまを輝きらでさうぞ男を丸  
 赤実しつじ体ていあひんがはるがとやまきさるゆにおまふふの  
 うひこのはは文おもソレハ 耳よりことたがひよなたご  
 はま更なるうちぬやとそまをねるハ素もとやたれ  
 ましこ私わたしの急いそな用もちのやきひしはしんモウお別わかれ  
 やまよと アイヤ今いまのあるものいふくさひじや  
 アイヤまがうてハおをかありまふ思おもひは



たうおまをうむいんぞもまうおまづりよお出がこ  
こませとひくはかきけるとそんまうらうまあうら  
子く物しやまも晴とれやうじや

△山中の日記し 左又

飛ひさや山中を急ぎゆへは向ふのむらぐくと  
して大イのうなをみ松の根ねより木まきをこして  
のちるひさや大よおころき身を何とよせたく  
はしじがうなをこいびきをのべうらちめうらたち  
さうまびが物掃いよくせんうかぐ海りもぬせだ

たうまじらうあつあつあるがうなで驚く身をほく日も  
たんたよあよびまきと今日よあまじきり

○家来の年忘 ト古

西さいせい照しょう唐たう糸いと舎しゃよ友ともとち田でん人じん膳ぜん後ごのさひひま入  
たる也彼のものまらたのうしと中合を近所を  
きよひたるあといよとむせしおまきとだんまんいど  
あるが僕ぼく一人も見んびせひなくあつくだんりんよあ  
まあり彼の海りを待たれたやうあうらうたれたあま  
まうくまを待たぬのひんいひのまよひと目形を待たぬ

さぞのうんといきこもりのさうらう<sub>ち</sub>の<sub>く</sub>人しめを<sub>ま</sub>らうか  
あまはらんのそ碑<sub>に</sub>はげぞ<sub>う</sub>あま<sub>は</sub>平ひの<sub>こ</sub>の  
うこりやよあろうとうちつ<sub>ま</sub>は<sub>ま</sub>さ<sub>ら</sub>んがむら<sub>な</sub>り  
伴<sub>よ</sub>はサア<sub>さ</sub>入<sub>ら</sub>る<sub>こ</sub>ヨと<sub>も</sub>あ<sub>ら</sub>う<sub>て</sub>ら<sub>な</sub>の<sub>な</sub>き<sub>て</sub>  
あ<sub>ら</sub>んが<sub>且</sub>那<sub>を</sub>を<sub>さ</sub>る<sub>より</sub>スワヤ<sub>あ</sub>ま<sub>と</sub>あ<sub>ま</sub>く  
て<sub>い</sub>らん<sub>せ</sub>り<sub>一</sub>は<sub>よ</sub>あ<sub>つ</sub>て<sub>あ</sub>ら<sub>は</sub>や<sub>大</sub>碓<sub>打</sub>は<sub>あ</sub>ま<sub>を</sub>  
守<sub>助</sub>アノ<sub>こ</sub>あ<sub>ま</sub>の<sub>飛</sub>ぬ<sub>が</sub>深<sub>ろ</sub>り<sub>な</sub>と<sub>ん</sub>を<sub>想</sub>た  
<sub>し</sub>ヤ<sub>ナ</sub>イ<sub>ヤ</sub>く<sub>一</sub>た<sub>ぬ</sub>や<sub>お</sub>れ<sub>の</sub>後<sub>の</sub>石<sub>で</sub>こ<sub>の</sub>四<sub>ま</sub>あ  
<sub>し</sub>そ<sub>何</sub>も<sub>も</sub>お<sub>ら</sub>な<sub>ら</sub>ん<sub>ご</sub>は<sub>し</sub>あ<sub>の</sub>ひ<sub>も</sub>く<sub>お</sub>ら<sub>な</sub>は<sub>な</sub>く

大<sub>き</sub>あり<sub>ま</sub>れ<sub>を</sub>ま<sub>は</sub>れた<sub>の</sub>影<sub>一</sub>さ<sub>ま</sub>く<sub>な</sub>か<sub>る</sub>  
アライ<sub>イ</sub>か<sub>一</sub>ま<sub>は</sub>れた<sub>ま</sub>ら<sub>の</sub>那<sub>を</sub>の<sub>想</sub>ひ<sub>一</sub>わ<sub>ま</sub>く  
別<sub>は</sub>仕<sub>よう</sub>も<sub>あ</sub>ら<sub>な</sub>ら<sub>ず</sub>に<sub>あ</sub>つ<sub>て</sub>よ<sub>ニ</sub>四<sub>つ</sub>あ<sub>ま</sub>ら<sub>し</sub>一  
く<sub>時</sub>そ<sub>ら</sub>を<sub>ら</sub>う<sub>と</sub>あ<sub>ら</sub>な<sub>ら</sub>う<sub>て</sub>こ<sub>の</sub>や<sub>あ</sub>ま  
お<sub>ら</sub>な<sub>ら</sub>よ  
△ <sub>千</sub>多<sub>の</sub>足 <sub>又</sub>樂  
ある<sub>寺</sub>の<sub>和</sub>尚<sub>む</sub>と<sub>こ</sub>を<sub>よ</sub>び<sub>射</sub>あ<sub>れ</sub>た<sub>後</sub>ら<sub>ん</sub>  
こ<sub>の</sub>あ<sub>れ</sub>と<sub>ま</sub>ら<sub>な</sub>ら<sub>ず</sub>に<sub>あ</sub>つ<sub>て</sub>人<sub>の</sub>あ<sub>ら</sub>な<sub>ら</sub>し<sub>の</sub>と<sub>の</sub>り<sub>や</sub>  
あ<sub>ら</sub>の<sub>あ</sub>の<sub>こ</sub>の<sub>な</sub>ら<sub>し</sub>と<sub>あ</sub>ま<sub>ら</sub>の<sub>な</sub>ら<sub>し</sub>と<sub>あ</sub>ま<sub>ら</sub>の<sub>な</sub>ら<sub>し</sub>と

ありもそほじうちとやとよひ付らばしづその  
日のゆふきとごんの男竹ぞうたをのらさくらの  
枝をぬけけがなふを納下坊とんで出て習を  
うしろたまでしたとめこりやあのそふ入あしの  
なるこくなくあてひるのよ

○ 信吉 宿 東

まこの位よりせんかーなるは国のもより  
本社、あむるがうあるは務を社との  
遠ね所へあてもうまんとせしげせまたあよとく

さらし物ーるんが工へくとせさなむひん  
△ 五年 女 鼎 一 梅

ままの肉へ出さぬ節よぬどきまわうかよあひん  
をうきまがへぬはあひんこなんを彩地を其らと  
けるがう出ているはあやこのうちかこのあひん  
状ぐるなははのめやうるんじまをゆかきつたや  
あひんこもあよんてあひんくるんであひんあ  
てあひんこもあよんてあひんくるんであひんあ  
か、アノ、あひんてあひんてあひんてあひんあ



まじりに外のものとあしりてあつたものがある  
りば女帝あんのうかむらぶるとあつたものがある  
りふらふ

嘯角力一卷終

嘯角力二編目

立春新大集 全部八冊

右ハ総舎の外野もこれに在り分新趣向

此集此惠投を希作

年忘新角力巻二

△ 回文鏡

大梁

隠居生玉をさかしてあけてあつるよまのち  
をひびユリヤ けちやちまればさげさげけ  
中よにうせれとはひのせうぶがてあつるひ鏡  
よまろをうけはけしひのあつるよまのちまの  
とんとあつるよまのちまのちまのちまのちまの  
まそあつるよまのちまのちまのちまのちまの  
まそあつるよまのちまのちまのちまのちまの

はまのせむしとありたれば後孫あるのうちに  
よしくとありまづとね大師さるるまづ  
とてちよとせんは四又せよまきうあげたれば  
飛ぶれを見て只安あしてりしもあぐあ

○ 苗字 遠の 任十

よーとよのこころ あふぐいよむじし男あまは  
えはくしてそまかまあひもひらあひのこそぞ  
あたりはーさまはゆるがちうるがたあひひと  
あうけある女と人志ねと笑うなりあかあま

よつけて只あめめとあちゆるよあひあひと男  
よあるはあひはとあしとんーむうははうりし  
世をまひくぞ思ひたるよひつはあちよもあひこれ  
たよあその見る目もびんあて女のたうちあははを  
あち何とあひとあをせはりつく男あまああ  
たり月もあちあある日あつあてあうとあよま  
ああなざりたればあはしみるりの心だあああ  
かのあをひあもあよああ後よりあてあをあ  
くいとああなりああああああああああ

くくとどつ何のい中で文七を突るおタイと何る

△ 糖 自糖

丁林

そちの身子めぐりふまざるたれと糖女のちひすも  
てつへさちいとふよふあたまよや今ならげを細う  
しては流ぐさよどやのよと出ておんやあちの  
むさこめぐりゆりそりやあまごり久しうちひすあふ  
ぬよよのそしやけるのあは流ぐ糖女をんるのよそ  
あしやあちらるうあいかや

○ 殿上人の執心

甘露水

アム 殿上人はてうあいの美人をぬれさせぬひてよりぬき  
くをあげきよあたませられ病の床よあしう 糖女  
曲業てんやさかたり 療治りょうぢよ心をたきまるとあとも平あ  
一人の老医りんをぬりして殿下てんげの五病根ごびょうこんもれこへ彼  
そ美人は別せあふあれいむさよけする陰とがをぬせ  
れあまあやとあまよきをたと系中の画工をぬき  
とけいす 作せられあへしとちあつ入とあはれを  
よあかりぬそらうとせとあつあつあはれをぬき  
画工の若人去屋敷がこへられぬはしけ陰をぬきの

はなををさびし陽をさうきつらぬち花びらくは  
又人あてにまをまはせぬかあらぬけれはまをを  
まをありとあらふまをまをありとまをまをの  
あまをのまを人あて者をさうらぬまをまを  
まをまをまをまをまをのまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを

後ぬけもてはまをちやあまよるまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを

△ いろの林鹿

ウニ

おせうは風將がる友三人おはまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまを

角三郎の世をのぞきかへりてかきしるは城の  
ある家客をのぞきかへりてある茶をたてし  
さびしより肉をたぎらば床のるよ束帯の画のかけ  
るのおよそのなをばらへりてあるか女のあやめは  
是をあやめとあやめのほ世をたひさすてあるおれ  
ははまは復者かへりてあるあやめとひいひいほいひ  
くだまのさるおれはあやめとあやめとあやめとあや  
まをぬるはあやめとあやめとあやめとあやめとあや  
ひいひいあやめとあやめとあやめとあやめとあやめと



角三郎

上人のうまをえむくあひとりてかうは後をぬり  
よそりばじとむかひかその人法ことあうよそ今の世そん  
かよらばいひの鹿かまのよもどくばいひのよもどく  
ぬごんたろりく遠くもくまうとくまろりの遠くは  
とほくあひとよもどくくたふたふ日

○ 本粟の書

昇井 武

さる禪僧かく一書をこころして極なる子をもけき  
の響よあ育きたの世をけりりかろるがらる日彼の子  
をつれておの寺のきりよひあはばこりておるをわるをの

僧あれをえ分てまよりても人目をまへの河東の四まふ  
ねもよひるやのふとられれば響き鼓もそく

△○ 乙の川系

布生

せうりせいの人が死せるがびやうくと廣の川系  
とあふよそいんや迷途うけとぎ極系びのよもどく  
取青鬼とく鬼が出ておのまの何ものや人ねん  
あはれでせうり候とじ何も斜あるゆじこまは  
はしとを極系まのりやまのりまのりまのり二鬼  
あはれ  
あはれて女房も持てい入るのろきあめたふ人

しまとめて喰ふ女のあれど女のあぢきあつぬ女のむぎ  
 くさどもあつたの川京うせう人いよくねの在りて  
 入じよまきり女房の味もえんておひますとよハ 鬼飯  
 トラ女のあぢきをあつてゐるウツ人女飯をまうとよハ 鬼小  
 ちよとそこのあぢかたのよふあものじや

○ 時行との 松隣庵

毎夜又とやりのハ強ひおてまうそふあナまきふとくとお  
 らぬらハイあうぶつてあまそふぞ原平いんすの百天晴の  
 切名とびくあうひひあうあうさうさうどやラ先ツせあうよせら

なるるといふうあそハイまの私も嫌本ののちりの母んそく  
 ちのてあつたまサアまうせつなるらうはまうまはまじや  
 ハイまよほいそあんあをそれ種のはいものがあじして夜川  
 てあつればしむせうあつムあやどそれうハイまのあそこ  
 朝日の袖白のあも宝のまあまびはけを喰あまじか  
 どやテラッレナラあつてさうのハッしハ揚をのんどのじや  
 後よ撲よあけこめハハテニをあめ法とめサ

△ 蕨の影を馳る 馬耳風

を以田人今よりありのちりくる名画エありしうそ徳大はよ







るや今も昔もむらさきをさかるといふも昔もなほを  
おしねぬんとするよしめゆりも後のまらぬる  
むだのころの教をまかめてアイトクク 実谷さうぶ  
今もあつた針一本金一ん後よあつてこの銀一ん金  
銀のまらとやこれなまら

○ 天竺のりま 倭教

何ゆらんぬきれぬるのまきまの法にける信佛法の奥  
後をひらぬんとあつてこのりまをさうぶと名づ  
も出達りて安んようかくと去居せんまのりまを天竺

こととんとるぐ 流砂とゆふをた述東天竺とか  
なりきよよとるたそふぬぬあればとらる人家よま  
よりて一宿をまえてゆーり納戸の因は佛とんらじ  
きものたへりねをてんぬくやとありてあるき郡  
も信係をちとるとかた今もち真うとかなん  
とててさうゆをあげ小いあより珍さうのお  
ふあし何ゆるとちあかたゆへねもあや一たるとは  
聖けへ中央は幣白をきてあつては月ちと日あま  
の像をうけ形あま白ひ糸巻たうぬれを旅信

是の如かる佛去よ何とて神道をまよひのふと問ひ  
 イヤしく佛去と申らんやと往古のよまて今も及ま  
 ずとて申すはたましく坊をあれは医者や儒者やのこ  
 してそハ神乃さかたてて極くともかく先祖の靈を  
 まはるることあるうち身と教令をまはるさハの  
 由りよ承事おとすぬの教之根を佛去の遠風結りて  
 志をいんハ忘れぬぬあるんといハイヤしく志をいんハ  
 りハ切めてあるべといふ志が先祖のよまやなくんとい  
 何とて解おはそ程ハぬらばやといハなやうこそいふとも







かやよきんせいの二月二日といふ夜まよは家ありつたあか金  
 乞ひよあけの女房出てくるい位や一糸指いさねまゝこ  
 唄めとゆきほしたう家ちん持ってまねまゝのまをら  
 叔く<sup>かん</sup>美<sup>み</sup>季<sup>き</sup>の果よ位まよりたうまてつるので  
 あろこも夜をん持てまねれとらけい<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>  
 屋してやらんを<sup>かん</sup>も<sup>かん</sup>女<sup>かん</sup>房<sup>かん</sup>が<sup>かん</sup>出<sup>かん</sup>て<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>  
 角<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>で<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>ら<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>す<sup>かん</sup>ハア叔<sup>かん</sup>も<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>つ<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>ら<sup>かん</sup>と<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>お<sup>かん</sup>も<sup>かん</sup>位  
 よ<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>の<sup>かん</sup>た<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>れ<sup>かん</sup>と<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>ハ  
 め<sup>かん</sup>ハ<sup>かん</sup>四<sup>かん</sup>又<sup>かん</sup>日<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>う<sup>かん</sup>田<sup>かん</sup>舎<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>ら<sup>かん</sup>れ<sup>かん</sup>は<sup>かん</sup>し<sup>かん</sup>と<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>ま<sup>かん</sup>い<sup>かん</sup>と<sup>かん</sup>あ<sup>かん</sup>を<sup>かん</sup>



しるべし門へおと家おほのうらでししう隣ぐらうふいぞ

○ 廓サトの本れん丸 信

掛あんどの焼めあてよぎめさうやくとてしほりいしほり  
ちとれとむりよおやくしめびとびとまひのねさるお  
とつゆるよけおのまんの合二角でぶらりまはすてお持合  
がまめりもてあるふちうがとて紙入より二朱しゆ浪なみつし  
てつしせぶとぬの淋しみたれがうらうらとぬぬぬぬませうをぬ  
親おや方のぬまうらうしてちりたてアとぬがはまいつふよふ  
しつしよふませりなぬのぶんとまやこらよりの後百又出して

まじでのみ塔たつぐわらとりのお供まじのまじりたぐいし圍いよ入で  
ぬめてつんせじぶまやまやま強よのぬぬぬぬしてあふれぬ  
てつしぬかきぬれとておがうよあのとと窓のあつりて  
よく見むがよひは拂はらひのぬをうぞぬかぬ良祝らじゆてまの  
何なにやうよあつるがどやナアナアま、百武茶ひやくぶちやよ

△ 佛の音生 浪なみ義

あつらうたといよあるお地ちきも上かみなよの地ちきへおよお  
うらりりりりあつははしとどる角かくひりりびあまう  
まてつらつらあつ暮くれふゆたて死し人をちのほほあつ

地をくらし是を喰ふをうゑをまのぐお大イの根が  
 出<sup>テ</sup>来<sup>ル</sup>のて汝等仏の多しといはれらるが食物をうりか  
 らいあるものといふ地をくらしはれりげは飢よおん  
 ておくれありありといふあれは狼ノワツとあり  
 み畜生めそといふやわれを送リヲレ

○ 凡 高 貴

石 磨

板ありてはあきこころしく 治部を果てぬらけや  
 てア是ハ水毎ヨキのふりぬれやうイヤまのふり木の葉  
 匠ぐらふんよまはしこ板離れもよの葉もふららば

ねも氣を射て酸まらしくははしつゝヤノ板をいお  
 まんがよもむらりもやまふもつておるものおしを射て  
 子孫を跡さぬ大石の魂ありがふよおしおぶらつまをてや  
 イヤアノかしまおと早七人たなをよめははたらイナ  
 イヤノむらりておるものいよ表もあつものむらりつてよお後  
 とお七をどらおはよは西に<sup>そくた</sup>お庭のふげらよおとんをたじ  
 除るに石を屏風原かたをたをみ所ハ上かん養つてり皆  
 一も余も大方高貴をていられはつていふるなをあらつておる  
 時よは良のぬらる根のぬらつておるが實ておふりもぬらなまハ



遠くから来たものらしきものへ「何は何をしてしるさういふの  
ておぼるや」中興の女を「何事か」といひしはした  
ソトおきて別れ付して「寝て目をさめてあはれうらさえ  
五瓶りんびんは古翁か」とて歌は仲ゆきせんがため子孫承る人  
陸分ちの累体は銀玉が「純て」されしはして「おぼるは  
もむかひせまりすは」ツクあつてそむかひの借人の許で「お  
おぼる」ソナナナナナ「ま多くをむかひはして」入るお  
まも支借しりやうましころや入ら何は度あきまはまが「ナ、ナアそれか  
えんのふとやテ」  
寧海拾遺 卷之終

年忘新角力卷四

○ 泥亀沼

大西

名石をうつめあひくおせをなまおむよははいて石  
好の人くうらくと「珍しくおむをたぬおとをたなく  
ある中よあふては」一ふ寝ねおれよあふるものあはたと  
うやくしく「さうあはるとは」みよりふ「お」お出し  
は「おむるよ」おむく「オハ」つて押して「まて」上「かた」をん  
し「かた」お「かた」をためて「うら」のそ「お」かた「かた」も「世」よ  
あはれ「お」の「うら」か「り」と「ま」をむ「お」しく「お」をとりん

とびく系つえんの割きぐ

△ 芝と敷

一名

門流寺の傍敷があらじぐと近所の佛を  
登あぬもやはじ込ぢりかひぐ位持まよのころあや  
みぢくくよせんとお入のころあやみかをかせバ体をも登  
夜登大よまをさおちそうあふのものよハ借さびよアノ  
ころあやみ家をわうーあなるんぢあてはう等とらうむ  
とびく位持ハテ板寺の家をひくもあもあもあまじ  
ていあんまりべいごぢいあ

○ 大佛の形

シムホ

何とを扉まけ大坂よも大仏を一軒いあ合さうあこ  
いとのトヤナ形をてんまういこくまハよあろがどの位  
よびるのトヤナもむむむバ京の大仏の傍よあてりヤ  
大てあお入トヤあの本材木は直も直りぐりぐまるそ  
あひ何あろあハテ町くハまお快持たまらるイヤ  
くまぢくくハの形もまもままハよあやくあん  
のイトくの収ぶはまうがあろツリヤもぢうまるハテ  
流をよせはらる、あが流をトヤが事まほして傍有えど

△ さいごぐん 二 一

夫者リ大名の家老蔵のめんも布ぢけいといふ事御を  
そのめ百姓のうごこのを昔よかんとまの金とたのよ  
おが好して百姓は養他ぢひほとあれたれが老のびく  
たごまき病なるを敷さるはきくぐはらんかさんくねや  
たへゆぢひが老をさひそくめられたたつたのよ出て  
ちぢめて百姓のいごを力るよあてあんろうをあひ  
よやられ見まそくの太者へ兵先絶を留るこよく百姓  
がめんごういごうしてたごまきあくのたごを二人と書て

○ 診まのむく一 角 榎

まむじ浦信<sup>いしほ</sup>を所とする大英男<sup>せい</sup>濃多のたごのまよ  
物をたごいしりぢ診まのてひめふとあくるよりあひま  
刀てよりがうく病ひよ念たままぢりを絶ままを悟  
て術をめらじいむむとあしりつたれもまよ診まな  
まぬらうあまうはくじしてぬらうあぢて近藤<sup>こん</sup>の人もめ  
よて日はける物<sup>もの</sup>の業<sup>わざ</sup>よそ出<sup>い</sup>るが日本とあひつつかあ  
て下ゆあまのじいごうとくぢぢらふては射<sup>あ</sup>をほけて上を  
新<sup>あたら</sup>ひあまのせり初とるをよくしてあまのよを

かのをあらゆるうらむを隣をあらかりなれをうらま  
まをあらゆるうらむを隣をあらかりなれをうらま  
まをあらゆるうらむを隣をあらかりなれをうらま  
見れぬひびく大の科人けいよるをさびきうせうとある  
又浦しよまへおちぢるるなりぬるうらむのたふを  
釣をのりて父ををほりたぬぬらうせの事をし  
こととこの科よりたけぬぬらうせの事をし  
こととこの科よりたけぬぬらうせの事をし

△ 艸履の風味

のふ女

小なぬでまぬぬらうせの事をし

よもや中居がひまらやたせぬあむせはしこあ  
のときみくうらむをあらかりなれをうらま  
がふとまぬぬらうせの事をし  
とんぢりよせせのようならまぬぬらうせの事をし  
やられのどやとこぢあまぬぬらうせの事をし  
のまぬぬらうせの事をし  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
くたぬぬらうせの事をし  
はゆりよまぬぬらうせの事をし

お前のたまのむねをいへばお前の心をわきまをきかぬ  
さうとうがうちをいへばお前の心をわきまをきかぬ  
れをよまうちをいへばお前の心をわきまをきかぬ

○ 船の信心 如雲

さる船の信心のおもひをいへばお前の心をわきまをきかぬ  
おん丸とや船のせんぎゅうでいへばお前の心をわきまをきかぬ  
おん丸とや船のせんぎゅうでいへばお前の心をわきまをきかぬ  
おん丸とや船のせんぎゅうでいへばお前の心をわきまをきかぬ  
おん丸とや船のせんぎゅうでいへばお前の心をわきまをきかぬ



るさまのいきなりとせんよみまていまされど伝心のはし  
ようのなせぬがせぬのなり田の樂を伝心するされ

△ 赤よはのき 人徳

らんごの太坂後念のさせんある田舎太どん新所  
ごせりけうあんも安きとく刀をじと揚屋をたご入  
世ふす持ゆり同屋の子代せんごうおどおきよとて  
ゆんせれどつとも越白おどおどしてゐるあゝ強念の越  
向裏まきよとくやし棄て来つしよどとりのよせられ  
を死念せの越がう十むつとつよたをひしてゐるをゆう

くゝおがちめてまおがうは落へおらうとうとうの方をみ  
たきばふか故事てあつて

△ 赤鳥の一エウ 野田鮮次

梅幸が忠長づうんよして幕の君よははととのたは  
ナトト 雲のいすまよあつてのもくふるたごせすてあつ  
ふハウめめそふあせすであのゆうよとてさうあつた  
分りてあすくふひイヤすてさう一のさん田が合めと  
六十と七十とのせり合のうらチヨイ〜ととまぐが  
あつてた乃のさるやがうみ十四

○ 世間の鐘

常流

むうの夜中村十次郎産女役考づけ世でよりほく短  
鐘よくきでせうりておちおちおれおぼくおうと  
かく出ぬ報として居るべしとあつむむ人の鐘をきん  
とよまはくおよりきより佐夜の中ふはるるえ  
をそもる合ぬるといふ身とて毎うハハア愛よぬたが  
らもあれでもたうでも信心まるけり同いよといふお  
れをかしまのそふあれだけおむけのとまのしほくうらると  
いふイヤサたとははられどとむくつとてかききいひ

あんでありたとして中々お堀おしてあむは合口信心を  
あつてむむ人のあつとあぞんしのあつたまやあつあつ  
あやあや来てサア初日をとてはじめてあつあつらうぐ  
よたあつ

△ 花生で笑

百毒

お宿よりあつあつお月よあつあつお月よあつあつ  
あつたはるるあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

板多き處切よきりはしてかゝあのかうの仕うちあき  
うげ板の隙目でよも傍よびよあうきぶくあふある兒  
づりきまはひ社うちとまくとまあきよあひんをまれを  
かりくぢれあき出をれまへイヤあふいとおぼたら  
まはるるそそれまきめとあふあきれまへまき幕  
であらうまはのよ

角力巻廻

年忘瀬角力巻み

○ 息子身洗

左上

いつよあとも子をまき親おるとま<sup>うま</sup>実体をむき  
子なりやれらひもあきんとあふまはれくあひせいを  
まきあいでせむあらばとあふまはれくあひせいを  
まきくよ友道とも洗ひ人食残も文一まきひうちて扱  
あひめくいらあふむきまよ後まきくあひけあひ  
あふまはひのあけよその親父の呉ん糸巻とまきく  
あふまはひのあけてあひけあひけあひけあひけあひけ



うち隣のむきごうかん付て又まはかよるぞイヤあら  
 のおぢが病を治すべし薬屋ゆけといふれり余は耳  
 り様<sup>ワザ</sup>もあつたのよとて彼まぢの息子おをむ  
 こんゆりておんぢで出せし下へゆてあはてぬが  
 こしこもあつた何よまはるぞこしせんぞあちのあぢよ  
 のまこといひ

△ 出番せとや 馬耳風

桶<sup>おけ</sup>くらしもまじりぬ祇の降るりぶこのあぢおを  
 の者の西いそ毎夜降るりのぢまんあまのものをい

せうよまぢおまじりあつて下よりませよのりうあてあま  
 と夜がふてまじりふとまよまて二階へあぐれがままにせ  
 ひあぐにあらあぐると上へまあをめて本とら道にあまが  
 後まらあてしむのめはいぢいあまのまあまをいぬ  
 あくくとあつはあのナトあつらうくあつたあぢあ  
 うハイあつらひあつたあつらひあつたあつたあつたあ  
 かにあつらひあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
 してあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
 してあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ドリ 女房方もお目取もはしてありてはなほしひいれ  
をやりくと息吹かひくもあざんを耳よりををを  
氣うはひうくとあざんおししるもあざりま

○ 當 自 務

大 西

或は運の守り執事とあざんあり内入て 子トお  
於中しつらも一様あつてあざんはあざんあざん  
あろはしつらと表をも致しあざんあざんあざん  
さやあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
日あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん

我おつあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん

△ 地 獄 の 儀

鬼 あり

巾着切ちあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん  
あざんあざんあざんあざんあざんあざんあざんあざん

あやうき年より出る所なるものひそかにひびき対する言を  
世にありたるを人けり方ぐえおろひて命をたすけつらん  
と云ふは後悪心をあめて誅の人よあれいと云ひ  
よかしるを後てハイをかくふびぶりのまゝおろしたるよ  
と云ふてまゝのいせう

○ 完 結

常 流

何と積長清きるなせうこう何をイヤイ アノ十 系の大仏  
よおの世なるげあめづらふらふてあのカイ何を言れぬおん  
るふものトヤ ア 何ぞとせよ イヤモ 何ぞとせよ

いんして構くよたてれがせといふアッウそのあまな  
あなハテナ あれは系の大佛の袂廻のおとこトヤとお  
りていふトナ

△ 江 基 の 謝

住 十

あつたのまゝトヤトヤとせんとおんぞこ子供もたんとあつたよ  
そおれはまゝをいふおんコトトヤトヤとせよおんおん  
乃公者あつたもあつたをいふものごころのトヤ  
さめおれしとせよトヤトヤとせよ大なる謝をいふ  
を江基とせよトヤトヤとせよおんおん

子も家出陽の池におちてあまされたらあたまはさうせり  
しそれでも今こそ池のうをひかひかたしあたまはさうせり  
とてやういひてハテおれはるまじしあたまのよやナ

○長生の術 赤ん図

老る者よりいらく御合中より老るる人のあたまは  
よいとせやくせやくをききあうせやくせやくせやくせやく  
あれ別してあたまをくくくくくくくくくくくくくくくく  
いよあたまはくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
らめきでもあたまはくくくくくくくくくくくくくくくくく



あるる理よそも務むるふ年だけよのちまたといふ  
ものやあつとていづも中より又近頃の志實生れたのんが  
いふ是れをみるゆゑやびらせの志やうとていふやれま  
あまをわれり茶喰ふ志あせうぞ

△ りんろろ

えん仙

あるまはしよそ下戸の志しよたまよめしを志らうとせ  
ひはとの皮返せんやあゝあゝうちより叔あんや  
あるまはしよそあまをいふしよまの志やうとていふ  
まゝら 友を それを志あつちやうとていふおであらぬ

えせの志やあれどたちまを志する茶やうとていふ志  
の志を出さるればとてんの志まらうとていふ志あつちよめ

△ 友の志立

瀬川

志よ強款ある志久ほうの男らりある友とていふの  
一方来ておれぬとて志立の志をいふとていふ志  
これが志あつちよめとていふ志とていふ志  
よめいひの志あつちよめとていふ志とていふ志  
よめとていふ志とていふ志とていふ志とていふ志  
トしとていふ志とていふ志とていふ志とていふ志

とまふ事後之をまびよるものれをわしおもしろく  
ゆいふしつあ白波のすりをうたげて共ハイヤくそこ  
を又一ふし越てふのかりよ白波の湖よまるる言  
又巻終

安永八兩申年正月二日新板

跋

清乳の人乃懐小の祿かづらふ  
古まぢ知里そ首掛芝の地志  
兼希を名神ふ時言あちるなりと

輯<sup>あつ</sup>已<sup>ま</sup>敷<sup>ま</sup>元<sup>ま</sup>三百余の笑話<sup>えら</sup>  
角力<sup>かくり</sup>のそとよとがてとと忘れや  
はまる龍<sup>りゆう</sup>耳<sup>みみ</sup>は揺若雷<sup>わが</sup>又<sup>また</sup>應<sup>おこ</sup>  
りおこが返しをまの志をいふめ  
りし古まよと一ハ破之入筆は貴<sup>たか</sup>  
價<sup>あがり</sup>もや比<sup>ひ</sup>後<sup>ご</sup>せん也<sup>なり</sup>肩<sup>かた</sup>持<sup>もち</sup>をを云  
まそ<sup>ま</sup>跋<sup>はく</sup>と寸<sup>すん</sup>廿<sup>に</sup>片<sup>ぺ</sup>を言<sup>を</sup>ま  
似<sup>に</sup>お

新編大五

新清書と云頂次等所八百五所筋 直回 橋 栄 乙

大坂

書林

板本細工人

御書物所

徳の内南也所八生集 橋 登密去清

乃於塘下大和老し有つめ 山田 登久去清

後は町廿々子交節首入 大和 登弥去清

今陸せん人の本節末入 坂 登三去清

曾根清彩地二丁目 丸 登平去清

妻屋町まがの町筋末入 大和 登吉去清

まがを小湊町角 海部 登勲去清

あまの庄 登かゝ町末入 板本 登傳去清

内久石比町末末入 板本 登平八

炭本町

深川久 登

横新

